

聖書:使徒の働き17章1～15節

説教:毎日聖書を調べた

はじめに

パウロとシラスが、ピリピという町に入って伝道していたとき、リディアとその家族が救われ、やがてピリピの町に教会が建てられていきました。ところが、パウロがしていることをよく思っていなかった町の人たちはパウロとシラスを捕まえ、鞭で打つて牢に投げ込んでしまいます。ところがその日の夜、二人が牢の中で賛美し祈っていたとき、大きな地震が起き、牢の扉が開き、足につながれていた鎖も外れてしまいます。看守は、二人が逃げたものと思い込み死のうとしたとき、パウロが「自害してはいけない。私たちはみなここにいる」と叫び、思いとどまらせます。看守は震えながら二人を牢の外に連れ出し、尋ねました。「先生方。救われるためには、何をしなければなりませんか。」二人は答えます。「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。」そうしてからパウロは主イエスの救いのみことばを語ったところ、看守とその家族は信じて救われていきました。

鞭に打たれて牢に投げ込まれる、それも大変なことでしたが今日の箇所でもパウロたちはまたまた大きなトラブルに巻き込まれていしまいます。なぜこのようなことが起きるのか。そこにどのような神の働きがあったのかを見てまいります。

## 1 ユダヤ人の反対

ここにはいろいろな町の名前が出てまいります。聞いただけではわかりにくいので、週報に地図を載せております。いずれの町もいまのギリシャ共和国の地中海沿岸に位置しております。ピリピから西に向かってテサロニケ、ベレアと旅を続けます。

まずテサロニケですが、いつものように安息日に会堂に入り、パウロはイエス・キリストの福音を語ります。そうすると、ユダヤ人もそうですが、ユダヤ教の神を敬っていたギリシャ人たちも、イエスを救い主と信じていきます。そこまではよかったです。5節にこうある。「ところが、ユダヤ人たちはねたみに駆られ、広場にいるならず者たちを集め、暴動を起こして町を混乱させた。そしてヤソンの家を襲い、二人を探して集まった会衆の前に引き出そうとした。」

ヤソンはユダヤ人で、パウロの宣教を通して救われた人です。群衆は、ヤソンがパウロをかくまって

いるに違いないと思い、家を探しに来ます。ところが見つからないので、役人のところに連れて行きこう訴えます。6節。「世界中を騒がせてきた者たちが、ここにも来ています。ヤソンが家に迎え入れたのです。彼らはみな、『イエスという別の王がいる』と言って、カエサルの詔勅に背く行いをしています。」これを聞いた群衆と役人たちは動揺した。」

パウロたちはテサロニケから逃れて次にベレアに向かいました。そこでもパウロの宣教を通して多くの人たちが信じました。ところが、ここにもテサロニケのユダヤ人がやってきて群衆を扇動し騒ぎを起こしてしまいます。パウロはベレアにもいられなくなり、アテネに逃れていくこととなります。

## 2 何を見て判断するのか

### 1) カエサルの詔勅

いったいなぜここまで執拗に迫害されなければならないのか。動機はユダヤ人のねたみからだったとあります。町の外から突然やって来たパウロが、ユダヤ教を信じていた人たちをまるでカツオの一本釣りのように釣り上げて次々とクリスチャンにして持って行ってしまう。そのように見えてしまうわけですからユダヤ教の指導者たちが怒るのは無理もない。でもこうなることはパウロも初めから覚悟していたことです。

彼らはこう訴えている。「カエサルの詔勅に背く行いをしています。」これは少し説明が必要です。

パウロの時代、地中海地域を支配していたのはご存じのようにローマ帝国でした。当時、すべての道はローマに通ずということわざがあったくらい、国境を越えていろいろな物や情報や人が集まってきます。ユダヤ人も例外ではなくて、イスラエルを出て海外に移って家庭を持ち、職業に就く人たちが沢山いた。いわゆる移民になっていくわけです。さきほどのヤソンもそうでした。

今世界中で移民のことが大きな問題になっていますが、ローマ帝国でも同様でした。律法にこだわろうとするユダヤ人は独自の文化を維持しようとするわけですから、どうしても地域の人たちと問題を起こすようになる。そこで、起源49年頃と言われていますが、当時のローマ皇帝クラディウスが、「ローマ帝国に忠誠を誓わないユダヤ人は追放する」という詔勅、命令を出した。これがカエサルの詔勅と呼ばれるものです。

これはユダヤ人たちにとって相当のプレッシャーです。ちょっとでも騒ぎを起こしたら国外追放になるわけですから、問題を起こしてはいけません。静かにしていなければ。そういう緊張をもって生活することになる。

## 2) 世の基準

テサロニケのユダヤ人たちはこれを利用した。パウロたちが「イエスという別の王がいる」と語ってカエサルの詔勅に背いていると訴える。これはどんな効果を生み出すか。パウロたちはローマ皇帝に逆らう悪いユダヤ人。自分たちはローマ皇帝に忠誠を尽くすよいユダヤ人。そのような図式を作り出す。パウロを悪者に仕立て上げて自分たちを守る。すごい知恵です。これは相当の効き目があったようです。パウロはテサロニケにはいられなくなります。

すごい知恵だと感心してられません。パウロを迫害している人たちは、いったい何を見ているのかを考えたい。前回、ピリピの町にいた占いの霊につかれた女性のことを見ました。パウロが占いの霊を追いだしてしまったために、この女性を働かせて食いものにしてしている男たちは、お金儲けができなくなったことを恨んでパウロを役人に訴えました。彼らは何を見ていたか。儲かるか儲からないか。お金を基準にして世界を見ている。

テサロニケの人たちはどうか。カエサルの詔勅を守るか守らないか、それを基準にして、パウロたちを犯罪者に仕立て上げる。なぜそこまでするのか。自分たちのテリトリーにパウロが土足で入り込んできて羊泥棒のように自分の所の信者を奪っていく。礼儀知らずだ。礼儀という基準が顔を出す。でももっと突っ込めば、心の奥底にあるねたみがすべての動機になっていました。

## 3) 聖書を基準にする

すべての人たちがそんなふうに通じたのか。いやベレアの人たちは違っていました。10、11節。「兄弟たちはすぐ、夜のうちにパウロとシラスをベレアに送り出した。そこに着くと、二人はユダヤ人の会堂に入っていた。この町のユダヤ人は、テサロニケにいる者たちよりも素直で、非常に熱心にみことばを受け入れ、はたしてそのとおりかどうか、毎日聖書を調べた。」

ベレアのユダヤ人たちは、お金でもない、政治でもない、個人的な感情でもなく、ただ一つ聖書という基準を据えて、パウロが語っているイエス・

キリストの福音は本当なのかどうか確認しようとなりました。

## 3 イエスはキリストなのか

1) 苦しみを受け、死者の中からよみがえられたではパウロはベレアの人々に何を語ったのか。それはベレアだけではない、どこの町に行っても同じことを語っていたわけですが、そのことは3節に短くまとめられています。「キリストは苦しみを受け、死者の中からよみがえらなければならなかったのです。私があなたがたに宣べ伝えている、このイエスこそキリストです。」

パウロは、旧約聖書の中に書かれていない全く新しいことを語ったわけではありません。油注がれた方、すなわちキリストと呼ばれる救い主が、神から遣わされてイスラエルを救って下さる。旧約聖書にはそのようなことが書かれている。それはユダヤ人であれば誰でも学んで知っている事でした。問題なのは、旧約でキリストと呼んでいる方が、ベツレヘムで生まれ、ナザレ出身のイエスと言う男と同一人物なのか。その一点です。パウロは言いました。「私があなたがたに宣べ伝えている、このイエスこそキリストです。」

それを聞いたユダヤ人たちの反応は完全に二つに分かれました。一つは、先ほども見たとおり、パウロを犯罪者扱いにして町から追い出していく。本当かどうか聖書を開いて調べることもせず、ねたみと怒りにまかせてナザレのイエスを救い主と認めませんでした。

そしてもう一つの反応は、ベレアの人々の代表されます。聖書を開いて本当にパウロが言っている事は正しいかどうかを調べようとした。調べた結果は12節にあるとおりです。「それで彼らのうちの多くの人たちが信じた。また、ギリシアの貴婦人たちが、そして男たちも少なからず信じた。」

聖書が矛盾だらけで理屈が通っていなかったなら、キリスト教を辞めてほかの宗教を信じた方がよい。でも、牧師になって聖書を調べる職業についてからますます最初から最後まで理屈が通っていると感じる。なので、きょうも安心して皆さんに語る事ができる。

## 2) 御怒りから救い出して下さる (1テサロニケ 1章10節)

最後にパウロのことばにあるとおり、なぜキリストは苦しみを受けなければならなかったのか。なぜ死者の中からよみがえらなければならないのか。そのことを確認します。パウロが後にテサロニケの

教会に向けて書いた手紙に書いています。テサロニケ第一1章10節後半。「この御子こそ、神が死者の中からよみがえらせた方、やがて来る御怒りから私たちが救い出してくださるイエスです。」

私たちが生まれながらに神から御怒りを受けなければならない罪人であることを自覚している人はあまり多くないでしょう。よい人間ではないかもしれないが悪い人間でもない。なんとなくそう思っている。でも、自分の心の中はどうか。悪い思いでいっぱいになっている。それが私たちです。でも、心の中のことは誰も見ることはできません。よい社会人、よい学生、よい夫や妻を演じていれましょうとやっていると考える。パウロを迫害していたユダヤ人たちがまさにそうでした。ねたみと怒りを心の内に抱えながら、そんなことは全く外に出さず、世の基準を盾にして自分を正しい者としていきます。

でもそれでよいのでしょうか。実は誰もが、心の中でこれではいけないと語りかけてくる声を聞いているのではないか。聖書はそのことを聖霊の語りかけと言っています。「神から受けるべき御怒り」と聞くと、驚くかもしれませんが、実は私たちは予感しているのではないのでしょうか。このままで済むはずがない。いつかすべて明るみに出される。

予感にあたっています。聖書は、神のさばきを受けると語ります。神のさばきの前に弁明できる者はひとりもいません。そこで神はどうされたか。キリストが身代わりとなってさばきを受けられました。自分の罪を告白し、キリストを信じる者が救われる道を十字架で示してくださった。でも、死んで終わりなら、結局私たちは何を信じてても最後は肉体が減りて終わりです。それでは空しいことを信じていたに過ぎない。神が与えてくださる本当の救いは、死を乗り越えていきます。信じる者は死からいのちへと移される。あなたは死んだ者だったけれど、いまは永遠のいのちのなかで生きることができるようだから、信じて喜びなさい。私たちの頼るべき基準としてこのことが与えられていることをもう一度覚えたいと思います。